
終わらない水曜日

大和伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わらない水曜日

【Nコード】

N19180

【作者名】

大和伊織

【あらすじ】

『私』が目を覚ますと、昨日も水曜日だったはずなのに、また水曜日でした

携帯電話のアラームに起こされ、私は目を覚ましました。重たい体を無理に起こし、急いで準備を整えました。玄関を出る前にゴミをまとめて、外へ出ました。今日はゴミ出しです。

いつもの場所に置こうとすると、たまたますれ違った隣のおばさんに笑われてしまいました。ゴミ捨ては明日よ、と。

あれ、と私は笑い、家の前へゴミ袋を持ち帰り、そのまま会社へと急ぎました。

近くのショッピングモールがセールをやっているせいでしょう、比較的早朝だというのに、結構人がいます。

信号待ちをされていて、ふと、昨日、男の子にアイスをつぶつけられてしまったことを思い出しました。今日は気をつけようと、青になった信号を見て、道路を渡ったそのときでした。

足元に冷たい感覚が走りました。私が下を向くと、男の子が火がついたように泣きました。足元には、ぶつかったアイスが無残に落ちていました。私が慌てて謝りながら、ポケットから小銭を出すと、男の子は途端に笑顔になり、それを掴んで走っていきました。

昨日と同じ男の子でした。向こうから慌てて走ってくる足音がします。男の子のお母さんでしょうか。私はまた謝られるのが気まずくて、その場を立ち去りました。

二日続けて同じ男の子にアイスをつぶつけられるなんて、こんな偶然もあるんですね。

おはよう、と声をかけてきてくれた同僚が、昨日と同じワンピースを着ていました。よほど気に入ってるのね、と私が笑うと、彼女は不思議そうに首をかしげ、どうして分かったのと笑いました。

そして彼女は言いました。これ、昨日衝動買いしたのよ。いいで

しょう。

昨日も聞いた、という言葉は、なぜか出ませんでした。

ランチが終わり、帰ってきた途端に電話が鳴りました。出てみると、間違い電話でした。残念ながら、うちからピザは配達できません。

昨日も同じ間違いありましたよね、と隣の先輩に話しかけると、先輩は首をかしげっていました。

昨日、お前電話出てなかったじゃん。

私はゆっくりと顔を上げました。寝ぼけてるのか、と笑いながら肩を叩いてきた先輩に、私は笑うしかありませんでした。

昨日は売り上げの締め日の水曜日だったはずなのに、カレンダーは水曜日です。報告内容まで覚えているのだから、間違いはないはずなのに、なのに、どうしてでしょう。どうして空白の売り上げ報告用紙が、今日も私の机にあるんでしょうか。

夕方になり、急に雨が降ってきました。確か昨日もそうでした。ついてないな、最近ずっと晴れだったのに。

そんな言葉は、聞きたくありませんでした。

その日は、仕事が早いとずいぶん久しぶりに褒められました。昨日も同じ報告をしたんですから、当たり前といえば当たり前です。

まさか、なんて疑惑は、当然誰にも言えませんでした。

急な雨だったので、もったいないけど、仕方なくタクシーに乗りました。特徴のある声に、私は覚えがありました。思い切って、聞いてみました。

犬を飼ってませんか。

運転手さんはちよつと驚いてこちらを向きましたが、笑って、恥ずかしそうに首をかきました。

可愛くて、可愛くて。犬臭いかな、すいません。

いえ、と私は笑い返しました。犬の自慢話は昨日も聞いたので、私はあえて自分から、昔飼っていた猫の話、家に着くまで、まるで意地のように続けていました。

これは長い夢だと思いました。昨日と同じ今日を過ごしているなんて、そんな夢物語のようなこと、あるわけがありません。

その日はゆっくり風呂に浸かり、わざと体を疲れさせました。お酒を飲もうかと思いましたが、明日も仕事です、止めておきました。冷たい水を一気に飲んで、私は寝ました。

翌日、目覚ましが鳴る前に目が覚めました。携帯電話を見ても、テレビを見ても、水曜日でした。私はただ、ベッドの上で困ることしかできませんでした。

いつか夢が覚めてくれると信じて、何度も水曜日を過ごしました。なんとか耐えていましたが、五回目になるともう限界でした。

私は朝一に仲のいい同僚を迎えに行き、彼女は珍しいねと驚いてはいたものの、一緒に通勤することを承諾してくれました。

話してしまつていいものか迷いましたが、私は彼女に思い切つて言いました。

もうすぐアイスがぶつかるから気をつけて。

彼女はええ嘘だ、何言つてるの、と笑いました。信号が青になります。また足元に、冷たい感覚が走りました。男の子にお金を渡したのは、彼女が先でした。

すごいすごいと少女のようにはしゃいでいた彼女でしたが、同僚の自慢するワンピース、昏間に鳴る間違電話、私が言った通りになつていく度、彼女の顔色が青くなつていきました。そして、テレビもない、携帯電話も持ち込めない職場で、急な雨のことまで当たると、彼女はとうとう信じてくれたようです。

人に話せば何か変わるかと思いましたが、期待違いだったようでした。私は気味悪い話を話したことを詫びると、彼女は私の手をしっかりと握ってこう言いました。

今日は、違うことをしてみよう、と。

なるほど、それは考えていなかったことでした。例えば、会社に出勤しなかったら。これはもう今回は無理な相談です。

では、タクシーに乗らなかつたら。

これだけでもやってみようと思い、コンビニに傘を買いに行きました。残念、売り切れでした。みんな考えることは一緒のようです。遠回りだけどバスにでも乗ろうか、激しい雨を憂鬱に見上げていると、ふと、雨が一反止みました。

顔を上げると、傘を差しだして笑ってる男性がいました。彼は、急に辞めた同僚でした。どうして会社辞めたの、と私が聞くと、彼は驚いていました。

辞表を出すのは、明日の予定だったのに、どうして知ってるんだと。

いいと言うのに彼は駅まで送ってくれと言って聞かなかったの
で、私は甘えることにしました。

彼は辞める理由を話してくれました。急にお父さんが倒れて、実家に帰らなければならなくなったこと。お母さんも若くないから、思い切って、会社を辞めて、実家に帰ろうと思ったこと。私はこの話を知っていました。彼ではなく、翌日朝一番に上司から聞いたの
でした。

ここでようやく分かったことがありました。私は水曜日をただ単
純に過ごし続けているわけではなく、木曜日の朝一から戻ってきた
のです。そして、永遠に水曜日を過ごししているのです。

何か理由があるはずだと考えて、そして、あることに気づきまし
た。自分の異常な心音に。

どうしたの、と彼が笑うと、私は赤くなっているらしい顔を隠すのに必死でした。

元気でね、と私が見送りました。顔から流れるのは、雨だと言いつける天気でよかったです。風邪を引かないように長風呂に浸かり、そして、また眠りに落ちました。

目が覚めると、やっぱり水曜日でした。辞める前の彼に会うだけでは、私の時間は満足してないようです。私は携帯に向かって、欲張り、と呟きました。

まさか彼についていけば時間が進むのかと思いましたが、自分で笑ってしまいました。どんなに時空がねじ曲がっても、私がそこまで勇気が出ることはないでしょう。

それならば、出来そうなことといえば一つです。

何度目か分からなくなってきた水曜日の朝一番に、私は彼を捕まえました。そして思い切って言いました。あなたが好きです。

彼は驚いていました。当然です、今までそんなに話したこともなければ、特別親しいわけでもないのですから。数秒も経たないうちに、彼は軽く頭を下げて、詫びてくれました。負け惜しみかもしれませんが、この展開は始めてでも、予想できていた言葉でした。

その日の帰りは、さすがに彼に送られてはたまらないので、私はタクシーに乗りました。久しぶりに、とても充実した帰り道でした。話も弾み、私は運転手さんの奥さんの自慢話まで聞いてしまいました。

目が覚めると、木曜日になっていました。嬉しいというよりは、脱力の方が大きかったです。やっぱり私は告白したかっただけだったんでしょうか。

いえ、もしかしたら、全部長い長い夢だったかもしれませぬ。水曜日が終わった途端これですから、現金なものです。

会社に行くと、彼の笑い声が聞こえました。ずっと水曜日を過ごす夢を見た。彼と彼の友人は笑いながら、私とすれ違っていきました。私が彼に微笑むと、彼は少し照れたように会釈していきました。

昼過ぎに、彼が退社していったことを上司が静かに報告しました。誰もが驚いている中、私だけは冷静に、泣くのをこらえていました。

夜になり、私は彼へのメールを送って、そして布団へ入りました。連絡先？まさか。知らないから空ですよ。

届かなくてもいいんです。すつきりしましたから。自己満足結構だつて、すごくすごく好きだつたらいいですから。二人分の時間を狂わせるほどに。

このメッセージは送信されませんでした

もし私の気持ちを忘れても、他に好きな子が出来ても、私には教えないでね

また水曜日が来るかもよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1918o/>

終わらない水曜日

2010年10月11日08時07分発行